



宿題は教育上の不公平を永続させるのか？

- ほとんどの15歳の生徒が放課後の時間の一部を宿題に費やす一方で、2003年から2012年の間に宿題に費やされる時間は減少している。
- 社会経済的背景が高い生徒と、社会経済的背景が高い学校に通う生徒は、宿題に費やす時間がより長い傾向にある。
- 生徒に課された宿題の量は生徒と学校の間で数学的リテラシーの得点と関連がある一方で、学校システム全体の得点の決め手となるにはその他の要素がより重要となる。

「宿題」という言葉を聞くと、ほとんどの生徒は視線を泳がせ肩を落とす。それは保護者にとっても同じことである。保護者には、子どもが友達と外へ遊びに出たりインターネットを始めたりする前に宿題を終わらせるために、どうやって子どもをその気にさせるかといった、また別の問題があるのだ。なぜ教師が宿題を課すのかという問いには明確な理由がある。その理由とは、理解に困難を感じているまたは成績の悪い生徒に対して、教室で教わったことを学ぶため、その内容を生徒の長期記憶に定着させるため、理解が進んでいる生徒には更に刺激を与えるためである。家に静かに勉強できる場所がない生徒や、家庭内や仕事上の役割を果たすために宿題の時間を確保できない生徒もいるだろう。また子どもが宿題をする際に、指導したり、やる気を起こさせたり、サポートしたりということに対して、仕事の負担やリソース不足、その他の理由により困難を感じる保護者もいるだろう。その結果、宿題は異なる社会経済的背景を持つ生徒間の成績差を拡大するという、意図されていない結果を生み出しているのかもしれない。

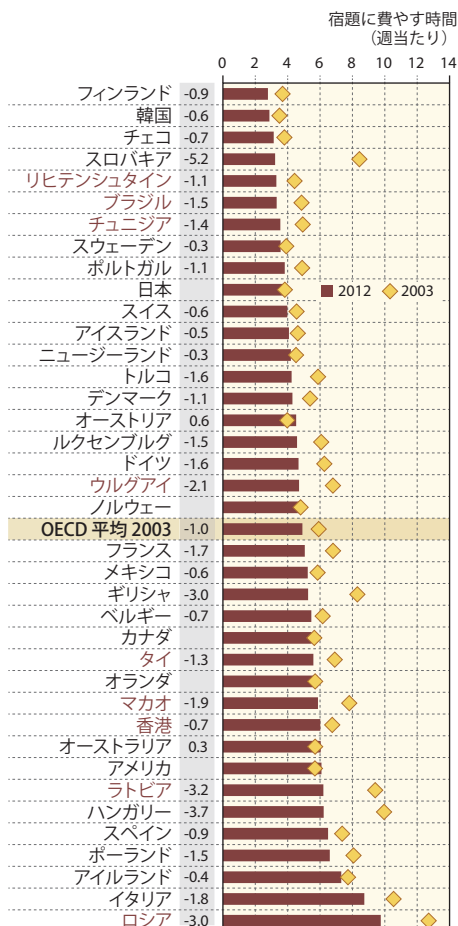
世界中の生徒たちに宿題が課されている。 宿題は2012年のPISA調査に参加したすべての国・地域で課されている。生徒たちは、民間企業が運営する課外授業への参加や、個人教師との勉強、または保護者やその他の家族との勉強といった、その他の学習活動より多くの時間を、(教科に関係なく)教師から出された宿題やその他の課題をすることに費やしている。2012年のOECD平均では、15歳の生徒はおよそ週5時間を宿題にあてている。生徒が回答した宿題にかかる時間は、国によって有意な差が認められる。



例えばアイルランド、イタリア、カザフスタン、ルーマニア、ロシア、シンガポールの生徒は、平均して週7時間以上を宿題に費やしている。一方で上海の生徒は、宿題をするのに平均で週14時間かけていると回答している。対照的に、フィンランド、韓国では宿題に費やす時間は週3時間以下である。

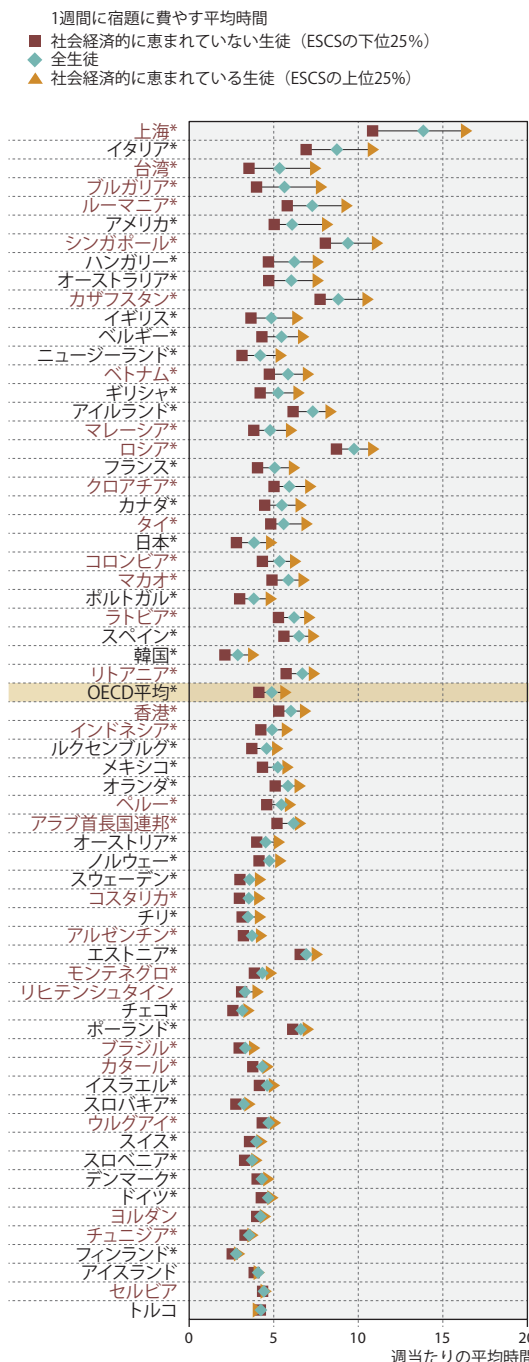
38の国・地域の内31の比較可能なデータにおいて2003年と2012年を比較すると、宿題に費やす時間数は減少している。

宿題に費やす時間数は十分であるが、2003年より少ない



注：図は2003年調査と2012年調査の比較可能なデータの国・地域のみを示している。
 宿題に費やす時間の変化(2012-2003)は国・地域名の横に示している。統計的な有意差がある場合のみ示している。
 OECD平均は、2003年調査と2012年調査の双方に参加したOECD加盟国の値。
 2012年調査で生徒が宿題に費やす平均時間の少ない順に上から国・地域を並べている。
 出典：OECD, PISA 2012 Database, Table IV.3.48.
 StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932957479>

恵まれている生徒は宿題により多く時間を費やす



注：ESCSはPISA調査における「社会経済文化的背景」指標を指す。
 ESCSの上位25%と下部25%で宿題に費やす平均時間の差(上位25%—下部25%)が大きい順に上から国・地域を並べている。
 *の国・地域は統計的な有意差があることを示す。
 出典：OECD, PISA 2012 Database, Tables IV.3.27 and IV.3.28 (web).
 StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932957460>



2003年のOECD平均では、生徒1人当たりの宿題に費やす時間は週5.9時間で、これは2012年の週当たりの時間より1時間長い。ギリシャ、ハンガリー、ラトビア、ロシア、スロバキアでは、宿題をする時間が週当たりで3時間若しくはそれ以上減少した。宿題に費やす時間の減少は、2003年調査時は多くの時間を宿題にあてていると生徒が回答した国において特に顕著に現れている。オーストラリアとオーストリアの2ヶ国のみにおいて、生徒が宿題に費やす時間が大幅に増加している。

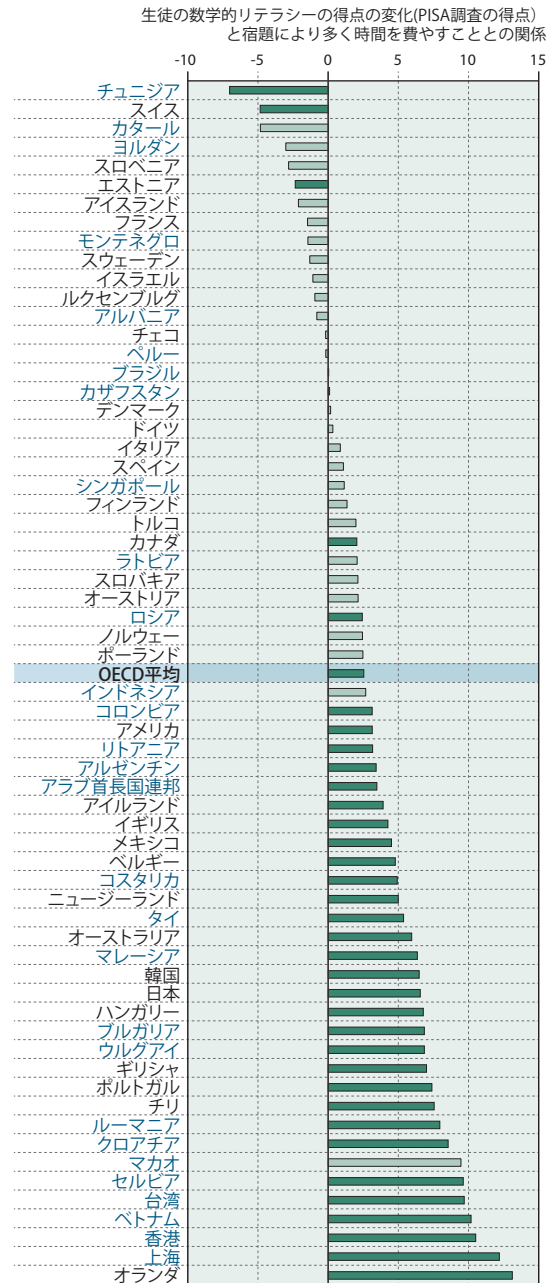
宿題に費やす時間の減少は、生徒の自由時間の使い方が変化した結果かもしれない。例えば若者の生活におけるインターネットやコンピュータの重要性の高まりが反映されていることも考えられる。または宿題を出す教師側の、宿題を出すか出さないか、そしてどの程度の量が適当なのかについての考え方の変化の表れかもしれない。PISA2009年調査では、宿題に費やす時間が週4時間程度を超えると、それが得点に与える影響はほんのわずかになるということを示唆する結果が出ている。宿題をする時間についての2003年から2012年の変化により、今やOECD加盟国のほとんどがこの4時間という分岐点に近くなっている。

宿題に費やす時間の長さは、生徒の社会的背景や学校のタイプと関係している…

PISA2012年調査に参加したすべての国・地域で、教師から課された宿題やその他の課題に費やす時間は、社会的背景の高い生徒の方が低い生徒より長かった。OECD加盟国で見ると、社会的背景の高い生徒と低い生徒の宿題にかかる週あたりの時間の差は1.6時間であった(社会的背景の高い生徒の平均は週あたり5.7時間、社会的背景の低い生徒の平均は週あたり4.1時間)。ブルガリア、イタリア、ルーマニア、上海、台湾では社会的背景の高い生徒と低い生徒の宿題に費やす時間の差が特に大きく、3.5時間以上であった。

社会的背景の高い生徒と低い生徒の宿題に費やす時間の差は、宿題に費やす時間数が似通っている学校システム毎に異なる。例えば平均して週6時間以上生徒が宿題をしているエストニアやポーランドでは、社会的背景の高い生徒と低い生徒の差はほとんどない(1時間またはそれ以下)。一方アメリカやアイルランドではそれぞれ3時間、2時間といった比較的大きな違いが見られる。国によってこれらの差があるという事実は、社会的背景の高低による宿題に費やす時間数の差を縮小することは、達成可能な政策目標であることを示唆している。

ほとんどの国では、宿題に費やす時間が生徒の得点と関連している



注:図はマルチレベル回帰分析の結果を示している(生徒レベル及び学校レベル)。数学的リテラシーの得点は社会的背景及び生徒層、学校層を指標付けた変数並びに学校で調査されたリソースにおいて回帰される。

濃い緑色は変化に統計的な有意差があることを示す。

学校の生徒の教師から出された宿題やその他の課題に費やす週当たりの平均時間が1時間の増加に対応する生徒の数学的リテラシーの得点の変化が小さい順に国・地域を並べている。

出典:OECD, PISA 2012 Database, Table IV.1.8c (web).

StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932957384>



PISA

IN FOCUS

前回のPISA調査の結果から、社会経済的背景の低い生徒と比べて、社会経済的背景の高い生徒は家庭内に学習に適した場所があり、生徒の保護者は学校へ行くことや、日常的に宿題を完了することを含め、教師が与えた課題に取り組むことの重要性に対して積極的な態度を示している傾向があることがわかってい

る。学校内における社会経済的背景の高い生徒と低い生徒の構成と、生徒が宿題に費やす時間数の関係性は、放課後自ら勉強するための生徒の可能性と能力についての教師の期待度合いを反映しているのかもしれない。

生徒が宿題に費やす時間数は、生徒が通う学校のタイプによっても差異がある。例えば、圧倒的に社会経済的背景の高い生徒集団で構成された都市部にある学校に通う生徒は、地方にある社会経済的背景の低い生徒が多い学校に通う生徒より、宿題に費やす時間が長いと回答している。更に私立学校や後期中等教育段階の学校に通う生徒は、公立学校や前期中等教育段階の学校に通う生徒より宿題に多くの時間をかけている。

結論：宿題は、もう1つの学習機会である。しかし宿題は、生徒の学力向上において社会経済的背景の違いによる格差を助長するものかもしれない。学校や教師は、理解に困難を感じていたり社会経済的背景の低かったりする生徒が宿題を終えることができるよう、彼らを後押しする方策をとるべきである。例えば保護者に対して子どものやる気を起こさせるための支援や、家に宿題ができる場所がない場合に社会経済的背景の低い生徒が静かに宿題を終えるための施設の提供ができるのではないだろうか。

…そしてまた、宿題に費やす時間が長いということは、生徒や学校の得点の良さと関係している。

生徒が宿題に費やす時間数は、PISA調査における個人の得点と学校の得点に関係している。つまり、宿題をしている時間が長い生徒はPISA調査の得点が高く、学校単位で見ても同じ傾向が見られる。社会経済的背景が同等で学校の資源も同程度の学校に通う生徒の数学的リテラシーの得点を比較すると、宿題により多くの時間をかけている学校に通う生徒の方が、宿題にかかる時間が少ない学校に通う生徒より良い結果を収めている。より多くの宿題が課される学校に通うことの、数学的リテラシーの得点における成果は特に大きい。香港、オランダ、上海、ベトナムでは、宿題の時間が1時間増えるごとに10ポイントの上昇が見られる。

しかし生徒が教師から出された宿題やその他の課題をするのに費やす平均時間は、学校システム全体の得点とは関係しない傾向にあることもPISA調査により明らかになった。これは、教え方の質や学校がどのように組織されているかといったその他の要素の方が、学校システム全体の得点に与える影響が大きいということを示唆している。

本稿に関するお問合せ先

担当: Daniel Salinas (Daniel.Salinas@oecd.org)

出典: OECD (2013), *PISA 2012 Results: Excellence through Equity: Giving Every Student the Chance to Succeed* (Volume II), PISA, OECD Publishing, Paris;

OECD (2013), *PISA 2012 Results: What Makes Schools Successful? Resources, Policies and Practices* (Volume IV), PISA, OECD Publishing, Paris;

OECD (2011), *Quality Time for Students: Learning In and Out of School*, PISA, OECD Publishing, Paris.

参考サイト:

www.pisa.oecd.org

www.oecd.org/pisa/infocus

[Education Indicators in Focus](#)
[Teaching in Focus](#)

次回テーマ:

「生徒の成績は時間の経過とともにどのよう

に上がってきたのか？」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。

Photo credit: © khoa vu/Flickr/Getty Images © Shutterstock/Kzenon © Simon Jarratt/Corbis

This paper is published under the responsibility of the Secretary-General of the OECD. The opinions expressed and the arguments employed herein do not necessarily reflect the official views of OECD member countries.

This document and any map included herein are without prejudice to the status of or sovereignty over any territory, to the delimitation of international frontiers and boundaries and to the name of any territory, city or area.

The statistical data for Israel are supplied by and under the responsibility of the relevant Israeli authorities. The use of such data by the OECD is without prejudice to the status of the Golan Heights, East Jerusalem and Israeli settlements in the West Bank under the terms of international law.